

小牧・長久手合戦記

土地に対する限りない愛着は、その土地にまつわる歴史を知ることから始まる——歴史的に要衝の地であり、「愛・地球博」で賑わったこの地を選挙区に持つ筆者は、四百二十年余り前、信長亡き後の覇権をめぐる戦われた「小牧・長久手の合戦」の全貌を詳細に綴る。

衆議院議員

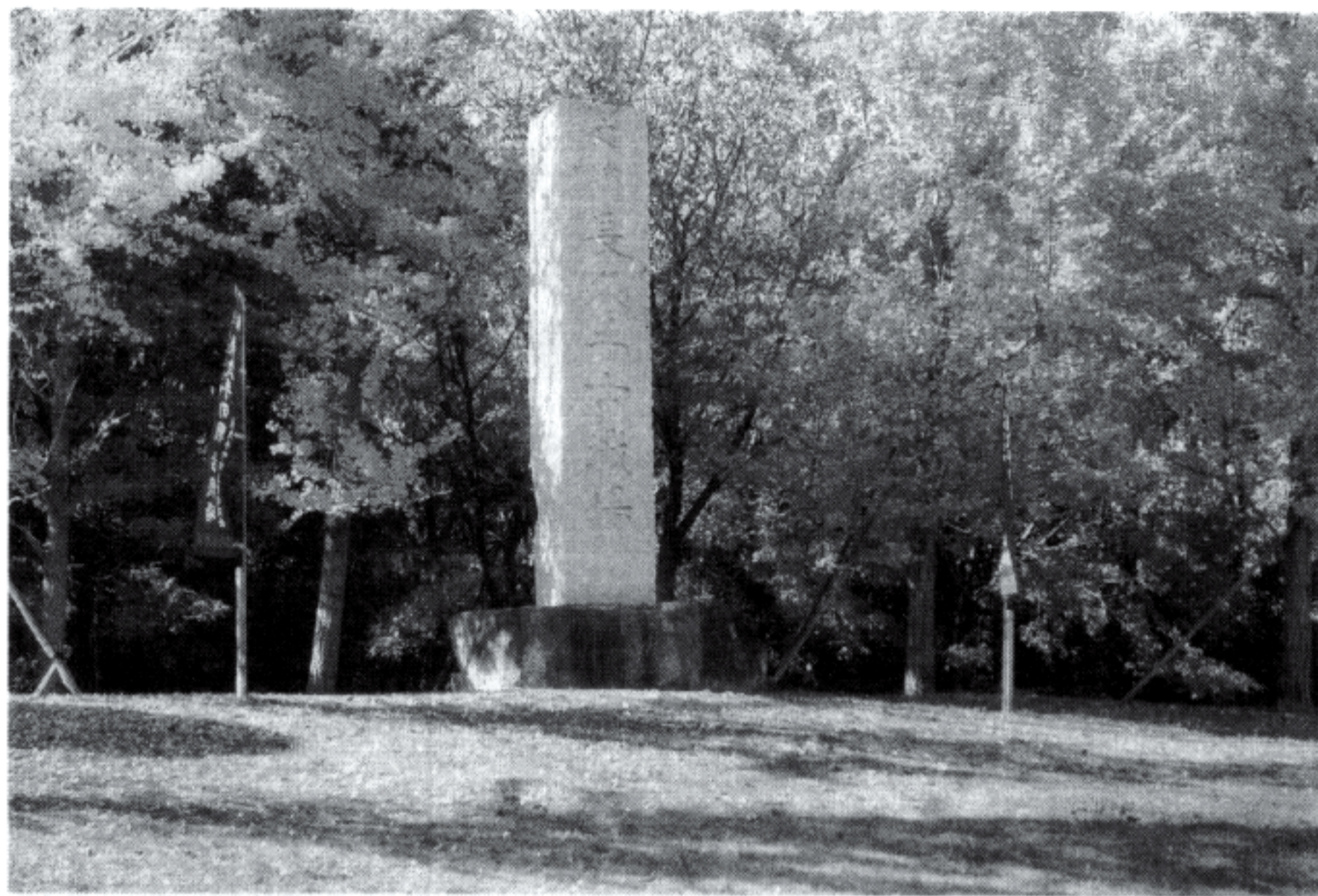
鈴木淳司



「関ヶ原」に先立つ天下分け目の戦い

三英傑を生んだ愛知は、東西交通の要衝故か、古来多くの歴史上の合戦が繰り広げられた地でもある。稀代の武将・織田信長が今川義元の大軍を奇襲により打ち破り、歴史上の表舞台に躍り出る契機となった桶狭間の戦い。織田・徳川の連合軍が、馬防柵と火繩銃のつるべ打ちにより、当時無敵といわれた武田騎馬軍団を殲滅し、以降の合戦の形態を変えたと言わしめた長篠の合戦。そして羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）と徳川家康が初めて対峙した小牧・長久手の戦い等々はいずれも愛知の地にあるが、それらはまさに戦国の世に轟く歴史上の合戦でもあった。

二千二百万人余の来場者で賑わった国際博覧会「愛・地球博」の会場西約三キロのところ、小牧・長久手の合戦の際の長久手古戦場がある。わが国初の常電導方式のリニアモーターカーとして注目され、また博覧会への主要なアクセスとして、連日多くの乗客を運んだ愛知高速鉄道（リニモ）長久手古戦場前駅のすぐ近くに、その古戦場公園と資料館はある。リニモで会場入りした多くの来場者が、住宅地の間近、こんもり茂った緑地を目にしながらも、おそらくそれと気づかず過ぎたであろうこの地こそ、史上名高い小牧・長久手の合戦における長久手の戦い中、最大の激戦が展開された仏ヶ根一帯である。



長久手古戦場跡に立つ石碑(古戦場公園)

小牧・長久手の戦いとは、織田信長が本能寺の変で斃れて以降、台頭する羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）に対抗し、自らの立場の擁護を徳川家康に求めた織田信長の次子・信雄と家康の連合軍が、信長亡き後の覇権をかけて秀吉と争った戦いであり、両雄が実際に刃を交わした唯一の戦いでもあった。

世に、「天下分け目の関ヶ原」とはよく言われるが、実際の天下分け目の戦いは、頼山陽がその著書『日本外史』に言うとおり、実のところ、徳川家康の存在感を秀吉と世間に知らしめた小牧・長久手の合戦こそが、その名にふさわしい。

小牧・長久手の合戦と称される戦いは、実は一つの戦いではない。羽柴・徳川両軍がそれぞれ犬山城・楽田、小牧山に陣を敷き、時折の小競り合いをはさみながらも持久戦として対峙（小牧）した中で、その膠着した局面打開の為に、羽柴方の武将・池田勝入恒興とその娘婿の森武蔵守長可（本能寺で織田信長と共に斃れた森蘭丸の兄）らが家康不在の岡崎城下の奇襲を進言し、その中入り（背後の奇襲）作戦に出陣した羽柴方『総大将・三好秀次（後の豊臣秀次）、池田勝入恒興・之助父子、森武蔵守長可、堀久太郎秀政』と、それを追撃した徳川軍『（先遣隊）榊原康政、大須賀康高、本